
サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

イボヤギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サウンドのないサウンドノベル　　“殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

【Zコード】

Z0590K

【作者名】

イボヤギ

【あらすじ】

読まれるあなた自身の選択によって、ストーリーが変化してゆくという、お馬鹿な試みのサウンドノベル風な代物です。（もちろん、音は出ません）完全犯罪に一步近づくのも良し、失敗するのも良し、はたまた、未遂で終わるのも良し……とにかく、気軽にチャレンジして下さいませ。贊否両論　　いえ、反論ばかりではございませんようが、何しろ“あっちゃこっちゃん”に飛び回ります。従いまして、気の長い方にはそれなりに、短気の方にはしち面倒臭く、このよう

に感じられるやもしぬません。
再掲いたします。b yイボヤギ

新IDに移行しました故、ここ

ふりだし（前書き）

イボヤギです。各章の末尾に“選択肢”が“ありますので、「これつ！”と思われます番号の章に飛んでくださいませ。（リンクが貼れないでの、その都度TOPに戻る必要がございます。あしからず）なお、“選択肢”がなく、そこで“了”とストーリーが終了する章もございます。お馬鹿な試みなので、どうぞ寛大なお心を持ち、チヤレンジしてやってください。また、様々なご意見を賜りたく思いますので、贅沢にかかわらず宜しくお願ひ申し上げます。では。

ふりだし

「ねえ、光つたらさ、何故リンゴが嫌いなの？」

それなりに有名な話らしく、たまに友人に聞かれる事がある。自分で考えても、その理由は定かではない。まあ強いて言うならば、あのクエン酸かリンゴ酸かがもたらす酸っぱさだらうか？ だが、決まってこう答える事にしている。

「好きや嫌いには、いちいち理由なんてないと愚うよ」

今も、一つ嫌いなものが生まれている。だが、今までとは違つて、その理由ははつきりしていた。“憎い” $2 \times 9 \times 5 = 90$ まさに、“苦渋”だ。この荒牧省吾だけは、断じて許す気持ちなど持ち合わせてはいない。間違いなく、ここまで他人を拒否したのは初めてだ。

それは、三日前の夜だった

「じゃあね、亜佐美。明日空いてる時にも、また電話頂戴。その時に時間を決めようよ！」

高校時代からの無一の親友である、志垣亜佐美とはここでのところ会つてはいない。メールも、以前は毎日やり取りしていたのだが、徐々に頻度も少なくなり、今では月に数回程度のものである。しかし、そんな些細な事などは関係なく、親友には間違いはなかつた。疎遠になつてている原因は、付き合つている男にあつた。相当な嫉妬深い輩と聞いている。このような、古くからの友人の私にでも、平気に嫉妬してくるというのだから、相当に性質が悪い。亜佐美からも、メールの度にその不満が漏れており、彼女なりに、かなり悩んでいる風にも見て取れた。私に出来る事は多くはないが、まずは久しぶりに会おうと、今しがた電話したのである。

話す事など、特に考えてはいない。相手の顔を見ながら、誠心誠

意、考えを述べるつもりだ

携帯電話の着信音で田が覚めた。もちろん、誰からの電話なのかは即座にわかる。それにしても……

（いくら、空いてる時間と言つても　まだ、六時半？　早すぎるよなあ）

「もしもし」

聞こえてきたその声に驚かされる。知つてゐる声とかではなく、男のものだつた。

「もしもし、笠間光さんの携帯電話でしようか？」

「え、ええ、そうですが……おたくは？」

「朝早くから申し訳ありません。志垣の弟です……」

何か言葉を挟もうとも、それができない。頭もまだ回つていない。

「姉の亜佐美が、今朝亡くなりました」

「う、嘘！」その先の言葉が出てこない。相手も待つてくれている。よつやく

「どうして……何故？」

「冗談です　これを期待したが

「自分の部屋で倒れていきました。それを発見して、父がすぐに救急車を呼んだのですが、すでに……」努めて冷静ではあるが、相手の声も詰まっている。

「すでに、姉は息を引き取つておりました。そこで、親友の笠間さんには、こうやつてまず最初にお電話を差し上げたのです。あと、水戸さんにも電話しています。どうか、お一人で手分けして、知人の方々にこの顔をご連絡してくださいませんか？」

「え、ええ。わかりました」

恐らく、このように返事をしたような気がする。

電話を終え、呆然とする。“何故？”の答えを聞かされていない事に気づくわけもない。

どれぐらい経つたであろうか、ともかく我に返つた私は友人らに

連絡しまくった。

三十分ほど、友人たちに連絡し、水戸雅恵ともやり取りをして、亜佐美の家までは車で向かつた。

運転しながら、冷静を取り戻していくうちに無性に腹が立つてきている。連絡した友人の中に、『そんのは苦手だから』とか『そんなに親しくなかつたから』とか御託をならべて、友の死に駆けつけるのを拒否した連中がいたからである。人間を見た思いで一杯だ。

（これじゃ亜佐美も浮かばれないよね）

陳腐な言葉だが、まさしくそう感じた。

田の前にお茶が出され
「光ちゃん、有難う、ね」
そう言つ母親は、無理に笑顔を繕つてゐるのが悲しい。
「い、いえ」

「それにして、立派になつて……おばあん、驚いたわ……」やは
り限度がある。
「なのに、ど、どうして、亜佐美だけが……」
泣き出す母親に

「お、おばさん。元気を出してください。亜佐美に笑われますよ」
これしか言えなかつた。何故死んだのかなどと聞けるはずもない。

相手が乱れれば乱れるほど、不思議と自分が冷静になつてくれる。

その時、チャイムが来訪者を告げた。ここが潮時と感じ、私は腰を上げた。

「おばさん、元気を出してくださいね。ところで、是非とも葬儀に参列したいんですが」

新たに訪れてきた顔見知りの客たちと軽く挨拶を交わして、私は車へと向かつた。

その時、後ろから

「笠間さん。今日は有難うございました」

振り向くと、声から、恐らく今朝の電話の主と思われる青年が立つていて。

「弟の志垣健一です。姉がいつもお世話になつていていたようで
「い、いいえ、こちらこそ、亜佐美には世話になつぱなしでした。
あれつ、過去形だなんて……」再び、緩くないはずの涙腺が緩んで
くる。

「」これはどうも、青年は頭を下げながら

「しかし、笠間さんにだけは本当の事をお伝えする必要があると思
いましたので」

「ほ、本当の事、ですか？」

「ええ、対外的には言えませんもので」彼は、目の前まで近づいて
き、小声で

「実は……姉は、自ら命を絶つてしまつたのです」

「自らつて？」

その可能性もありそうな氣もしていただが、やはり実際に耳にする
と驚いてしまう。

「ええ。ここに遺書もあります。他には見せられませんが」

そう言つて、相手は胸の内ポケットから封筒を一つ取り出し、こ

ちらに渡してきた。

「そこには、笠間さんの名前も記されています」

果たして、一・二行ではあったが、私にも触れられていた。『メンね』とか『許してね』とかの文句だつたが、十分すぎるほど心に響いてくる。同時に、別的新たな感情も芽生えてきた。

「どうやら、ここに数回載っている『省吾』なる男が原因のようですね？」

「笠間さんもそう思われますか。実は、その荒牧省吾といつ男に、姉は相当振り回されていました。異常なくらいに嫉妬深いとか」

「それは知っています」

「他にも、自分のそれは棚に上げて、他に多くの女性とも付き合っていたとか」

「そ、それって酷い話ですね！」

「でしょ？ 姉もかなり我慢していたとは思いますが、さすがに最後の方には、頻繁に愚痴が漏れ聞こえていました」

外見は穏やかさを繕つてはいるが、そこはやはり若者だ。その表情には怒りが徐々に現れてきている。少しの間迷つた挙句、こう言葉を重ねてきた。

「それに、よく顔にアザを作つて帰つてきました」

「ド、ドメスティック・バイオレンス……ですか？」

「ええ、間違いないと思います。でも、本人に何を聞いても一言も言わなかつたものですから」

「警察には？ 法律も定められているから、彼らも動いてくれたはずですよ」

「“DV防止法”の事ですね。でも、あれはあくまでも配偶者間限定です」

「だけど、人を傷つけるんですから、何らかの罪になるはずでしょう？」

「ええ、暴行罪とか傷害罪にはなりますが。何しろ、当の本人が全

てを否定しましたので

「亜佐美自身が、相手をそこまでかばったんですか……」

その心理状態が、経験不足のせいか今一つ理解できない。

「おーい、健二。こっちに来てくれ

家中から声が掛かった彼は、早々に立ち去りうとした。

「すみませんでした、尾を引いちやうような話をしまして。どうし

ても、事実を伝えたかったので

「い、いえ。こちらこそ言いにくい事をお話しただいて。では、失

礼します」

とは言つたものの、“尾を引く”どころか“導火線”にでも化けて
しまいそうな内容だった。

- 1、 葬儀には参列しない
- 2、 葬儀に参列する

あれから家に帰つて、いろいろと迷つてしまつた。明日の葬儀で、この内情を誰かに言いそつた氣もするし、万が一にでも荒牧なる男が現れた際には、我を忘れ食つてかかりそつた氣もする。そうなると、ご家族や知人やら、いや亞佐美自身に迷惑をかけるのは明らかだ。

そして出した結論は 明日は欠席というものだつた。親御さんや健一君を始め、周囲からは“冷たいヤツ”と罵られるに決まつてゐるが、きっと亞佐美だけにはこの気持ちが伝わつてくれる事だろう こう、自負している。

もちろん、一年後、五年後、十年後の今日……いや、この私が生き続けてゆく限り、これらの日には、必ずお墓の前で手を合わせる事を心に決めてゐる。了

1 (後書き)

懸命なるご判断です。友を、人知れずいつまでも偲ぶ……素敵な光
景が目に浮かびます。b yイボヤギ

家に帰つて、あれこれ聞いてくる母には閉口した。ある程度はしゃべれても、肝心な話なんて言えるはずもない。とにかく、食事していくも入浴していくも、健二君の言葉が耳に貼りついたままだ。黒一色の身なりを準備した私は、亜佐美との想い出を胸に、早々にベッドに潜る事にした。

翌日、葬儀の会場には、失礼だがわざと少々遅れて到着した。受付には、水戸雅恵他、顔見知りの数人がいる。その誰もが、指輪の跡が白い。

「久しぶりじゃない、光」

「そつちこそ」

当然、場所が違つていたならば、もつと会話も盛り上がり、さながら同窓会にでもなるところである。が、ここは斎場だ。ましてや、この手には数珠やふくさも持つていて。

雅恵に無理を言つて、亜佐美の友人・会社関係・その他、この三つの帳面に目を通す　やはり、お目当ての人物は来てはいない。

小一時間で式も終了し、耳に葬儀社側のマイクの声が入つてくる。それに従つて、当初の予定通り、私も用意されているマイクロバスに乗り込む。ざつと見渡すも、知り合いの顔は見当たらない。やはり、冷たいものだ。

やがて、締め切つているにもかかわらず独特の匂いが鼻についてき、目的地が近い事を教えてくれた。

最も哀しい瞬間は終わった。『ごく最近まで元気だった生身の身体が、今こうやって数本のものに変わるのは、本当に忍びない。他人の私でもその様な気持ちになるのだから、今まで育てた両親の気持ち

ちなんて 到底、計り知れない。

思いを断ち切るよう外に逃げた私だが、照りつけてくる太陽も、

涙を乾かすまでは至らないようだ。

「今日は、最後まで有難うございました」

見上げていた顔を声がした方に向けると、そこには健一君がいる。

今見ると、三つぐらい下 二十歳そこそこだらうか。

「いいえ、健一君の方こそ、お疲れが出ませんよ」

「あ、有難うございます」

恐らく、本来のものとはかけ離れた笑顔で彼は答える。

「やはり、来なかつたみたいですね？」

「え？ 笠間さんもチェックされたんですね？ ええ、やはりあいつは来ませんでしたよ。来たら来たで、少しばかりつかとも思つたんですが」

今の一言は気になつたので

「許す……ですか？」

「ええ。もはや、許す気なんて、これっぽちも残つてはいません」

ここで、彼はこちらの表情を覗つよう

「笠間さん。あなたはどう思われます？」

「どうつて言われても」私は、今の思いをそのまま口にした。

「そうですね、『喜怒哀樂』を遡つて来ているような気がします。明日久しぶりに会えるという“樂”から、“哀”になり、今では気持ちが“怒”と変わっています」

相手は、今発せられた言葉を噛み締めている様子だ。そして、やがて

「では、『喜』まで戻られる気持ちなどはありますか？」

「“喜”まで戻る？」

「その言葉の通りですよ。復讐して、喜びを味わうのです

復讐 正直言つて、そこまで考える余裕はなかつた。

「その復讐つて？ 様々な復讐が考えられるのですが」

とは言つものの、最悪のケースも私なりに頭には描いている。

「復讐とは……始末する事です」

「殺すつもりなんですか？ 荒牧といつ男を？」

まさか『己』の口から「」の言葉が出よつとは、予想されしていなかつた。

「そうです。殺すんです。それぐらいの報いは然るべきもの。そう思いますが？」話す度に表情が変わつてくる相手は、からにこちらに向かつて

「無理にとは申しませんが、成功させるには、是非とも笠間さんにも協力して欲しいのです。如何なものでしょつ？」

- 4、 3、 一日保留にする
- 4、 即座に了解する

家に戻った私は、一人考えあぐねている。もちろん、誰にも相談なんてできるはずもない。

（復讐……殺す……）

あれほど、“断じて許す気持ちなど持ち合わせてはいない”と思つていたくせに、こうやって久しぶりに悩んでいるのが、何とも気恥ずかしい。だが、ややもすれば、自分の人生がそこで終わつてしまつただから仕方がない。

（そこまで、あの荒牧という男が憎いのだろうか？）

会つた事さえもない男である。この考えは、こうも繋がつてくる。

（そこまで、私は亜佐美の事を思つているのだろうか？）

やがて、出した結論は

（そんな事をしたら、亜佐美も悲しむだろう）

要は、亜佐美の気持ちをダシにして、自分を正当化していくに他ならぬものだつた。

（所詮、私も冷たいヤツなんだな）

そう自嘲しながら、先程聞いた番号に電話をする事にした。了

3 (後書き)

良識ある御仁と思われます。これから的人生、是非ともこのままの姿勢にて、どうぞ頑張り続けて下さいませ。b yイボヤギ

「協力ですか？」

空恐ろしい提案だが、あの、とても良い子だつた亜佐美を追い詰めた男なんて、どう考へても許す氣は起こらない。いや、それ以上に救えなかつた自分に憤りを感じる。

（あと一日早く会つていたら）

「わかりました。是非、協力させてください」

「ほ、本当ですか？ いやあ、有難うござります」

これが、本来の彼の笑顔だろう。眩しさが際立つてゐる。喜んでいる彼は、早速、何かをポケットから出してきている。

「実は、これが荒牧省吾本人です」

「用意周到なんですね」

そこには、亜佐美とのツーショットの写真があつた。二人の笑顔で満ち溢れたものだが、その裏までは見えてはこない。

「じつやつて姉と比較すると、恐らく百七十センチそこそこですね。だから、体力的にも問題はない。あとは、いつ、どこで、どうやって実行するかですね？」

「何だか、“ 5W1H ” っぽいですね」

「いえいえ。Whyは復讐のため、Whatは殺人を、Whoは私自身の手で すでに、ここまでは決まつてますので」

恐ろしい言葉が次々と登場してゐるが、こちらにも閃いた事がある。

「その中の一つはわかりましたが、Whoに関しては私の方がいいのでは？」

我ながら恐ろしい事を口にしたものだ。相手は、当然驚いている。「えつ？ あなたが？ いや、それは駄目です。この復讐は僕が考えたものですから。あなたには危険な目に合わせられません！」 そう必死で抵抗する姿は、可愛くも見えてくる。

「しかし、最も優先すべき事は計画を成功させる事ですよ。亜佐美に弟がいる事なんて、敵さんも知っているかも知れないし、ひょつとしたら、[写]真か何かで面も割れているかも知れません。ましてや、成功したとしても、警察に真っ先に疑われるるのは間違いなくあなた方身内ですよ。その点、私ならば問題もそんなに多くはないかと」さすがに悩んでいるようだ。やがて、そこから出でたのは「申し訳ありませんが、やはり納得しかねます。ここは僕自身の手を汚すべきです」

5、 わかりました。そこまで言われるのならば
6、 いいえ、ここは譲れません

「わかりました。そこまで言われるのなら、もうこれ以上は言いません」

その後、彼の車で場所を私のマンションへと移した。

「綺麗にされていますね？」

「そんな事はないですよ。まあ、ここでも座つてください」

「早速、話の続きなんですが。あいつの住処はこの辺りのスカイコープなるマンションです」健一君は、車から持ち出してきた地図を捲り、指で小さな円を描いている。次に、別の頁で同様の作業をして、「ここ」が勤務している会社です

「ここですか。で、通勤手段は？」

「いや、わかりません。たまに姉を送り届けていましたので、車は持っているかと。しかし、どう考へても、会社よりもマンションの方がやりやすいような

「他の日もあるでしょうから、確かにそうですね。まあ、その意味では通勤途中も危なつかしいですね」

「残る問題は、このマンションのセキュリティでしょうか？ 所詮若造ですから、たいしたマンションには住んでいないとは思いますがね」

「でも、相当数の女から貢いでもらっているのなら、金回りはいいかも」

「私の言葉に、相手が気色ばむ。

「や、そうでしたね。それにしてもムカつく野郎だ」

「まあまあ、そんなに熱くなるのは失敗の元になりますよ。では、そのセキュリティについては後からでも確認するとして……」「とにかく、自分が主導権を持っているのに気づく。」「どのような手段を用いるか？ ですね

「そこ」が一番頭を痛めるところです。何しろ、いろんなものが考えられますから」そう言いながら、健一君は指を折り始めて「まず、毒でしょう。それから、刺すに絞めるに殴るに、まあ、撃つは無理ですから……」

詰まつた様子なので、後は受け持つて

「他には、突き落とす、焼く、溺れさせ、爆破させる、ガス中毒させる、押しつぶす……見方を変えて、自殺に追い込むというのもありますね」

スラスラと喋るのに対してか、はたまた最後のフレーズに対してか、とにかく相手は目を丸くしている。

「いろいろと出てくるもんですね。でも姉としての本望は、やはり苦しませた拳句に自殺に追い込む、でしょうが」

「それは、非現実的に見えます。まして、図太い神経の持ち主だったらなおさらです」

「それはそうですね。では、何が最も成功率が高いのか？」

「難しいですね。まず、焼くという手段は無理でしょう。あと、毒といふのも素人には簡単に入手できかねますよね」

「笠間さん。実は、毒に関しては知人に当たがない事もないんです。大学院の応用化学を専攻している奴なんですが」

「それでしたら、確かに入手はできそうですが。他人を介在させて大丈夫ですか？」

少し考えた拳句、彼は

「それについては問題ないとは思っています」

「しかし、最初の内は誤魔化せても、新聞沙汰になると気がつくんじゃないでしょうか？あの時に志垣に渡した毒薬だつて」

「うーん、口は堅い男なんで、念さえ押しておけば大丈夫かと」そこまで言われると、それ以上は反論できなくなる。しかし、危ない橋と思うのには何ら変わりはない。

「では、健一君。それ以外の手段は如何です？」

「そうですね。この本人としては、瞬間に勝負がつく“殴る”また

は“刺す”辺りを選択したいところです

「わかりました。実際に事を運ぶのはあなた自身ですから、お任せします」

「逆に笠間さんにお聞きしますが、あなたなら何を薦めますか？」

そんな、殺人手段についての推薦なんて聞いた事がない。いや、今後も聞く訳がない。しかし、意見を求められているので、私なりに

7、 ここは、やはり手を汚さない毒殺が

8、 ここは、やはり鈍器辺りで一撃を

9、 ここは、思い切って車ごと燃やしましょ

「いいえ、ここは譲れません。あなた同様、この私も成功を強く望む一人ですか！」

相手は、この勢いに圧倒され

「そ、そこまで言われるのなら、今日はお願ひします」

「今日は、つて 次回なんてありませんよ」

「は、はい。すみません」と、頭を下げながら

「では、どうやって殺りますか？」

この言葉に少しだけ考えて

「手段よりも、いかにしてあいつに近づくか？ まずは、これですね。但し、時間は掛かるとは思いますが」

「そう、こきなり殺せと言わなくても無理な話だ。」

「では、どうやって近づきます？」

「これまた、同じ様な台詞が飛んでくる。

「すぐには思いつきません」

彼の目が、こちらの爪先から頭のてっぺんまで舐めるように動いている。

「あなたなら、あなたの魅力なら上手くいくと思します」

10、「そ、そうでしょ？ やれそりでしょ？」
11、「えつ？ それは無理というものですよ」

「二二は、やはり手を汚さない毒殺がベストかと」
考えが一致したと見えて、彼も喜んでいる。

「やっぱり、そうですよね。アリバイも作りやすいですし」
「アリバイ？」

今まで、全く気がつかなかつた。でも、それに関しては、この二人の接点が表に出ない限り大丈夫のような気もする。

「ええ、アリバイですよ。必要だと思いますが」

「決行日に、あなたにできるだけ似ている男友達を食事にでも誘つて、身代わりにしましょうか？」

数多くはないので限定はされるが、一応候補らしき男の顔は浮かんでいる。

「似ていると言つても、知れてるでしょ？」

「だから、何か特徴を」 例えれば、あなたは明日から肌身離さず赤い帽子を着用するとかして、それを周囲に印象づける。私の方は、当日に男友達を食事に誘つて、事前にプレゼントをした同じ赤い帽子を被らせて、店の人間にでもその印象を植えつけておく。これだけでも、後日あなたを見たボーイ辺りは、“確かにこの人でした”って証言しますよ。人間の記憶だなんて、所詮そんなものだと思いませんが」

「そ、そんなに上手くいきますか？」

「おどおどさえしなければ、問題ないですよ。恐らくあなた自身も、そこまでいかなくとも似たような経験はお持ちでは？」

「は、はあ。では、明日にでも早速赤い帽子を手に入れます」

素直な人物だ。別に帽子でなくとも、いや、仮に帽子だとしても、青でも黄色でも何でもいいんだが。

「是非、そうしてください。赤い帽子……これでいいですね？」 相手が頷くのを見て、先を進める。

「しかし、毒の名前や効能は別としても、何に、どうやって毒を仕掛けます？」

「彼は考え込んでしまった。やがて

「そうなると、逆に人ごみの方が仕掛けやすいような気がします。

ランチの時間とか……」

「会社の食堂だったら、お手上げですね。じゃあ、外食しているのをお祈りでもしましょうか」

「その辺りに關しては、すぐにも調べてみます。あとは、プロに相談して適切な毒薬ならびに、その量や効能などを聞いてみます」

「即効性とか遅効性とかありますですね、確かに。まあ、その辺りはお任せします。では、具体的な決行日が決まりましたら、わかり次第お電話くださいね。こちらも身代わりの人間を用意する手間がありますもので」

一日後に、電話があつた。決行日は、次週の木曜日のランチタイムである。どうやら、お祈りが通じたようだ。こちらの方の段取りもスタートさせる。それにしても、会社は休むしかない。

木曜の昼前、彼氏を装つた男とのデートの最中だ。私は、予定通りに目をつけていた店にランチを誘う。戦争のような、バタバタした食堂では覚えてはもらえないで、今回は少々奮発して落ち着いた店を選んだつもりだ。そんな事など露知らず、お馬鹿な隣の男は、もらつたばかりの赤い帽子を喜んで被っている。素直だけが取り柄なので、扱いにも困りはしない。

時刻は、一時を回っている。気が気でないが、電話をする訳にもいかない。仕方なく、安全をみて、連れには一時まで付き合わせることにした。だが、待ちかねていたものは、ちょうど一時半にやってきた。

「もしもし」

「ああ、笠間さん。遅くなつてすみません」

「そんな事より、どうでした？」

「ええ、何しろ超満員の食堂だったので、隙を見つけるどころか、接近するのにも一苦労で」

「ええ、ええ。で、首尾は？」

「あいつがオーダーしたうどんに即効性の毒を入れました。そして、すぐに店を出ましたが、その際に大騒ぎになりました」

「は、はい。それで？」

「店を出た後に、陰から様子を覗つていたのですが、救急車がすぐにやってきました」

「ちゃんと死んだんでしょうか？」

「我ながら怖い発言だ。

「ええ、聞いた量よりもほんの少しだけ増やして使つたので間違いはなかろうかと」

ようやく、これで一安心したので初めて労をねぎらつた。

「健一君、お疲れさまでした。これで、亜佐美も浮かばれるというものですね。ああ、こっちのアリバイの方も上々の出来だったと思います」

すぐに家に引き返した私は、大好きな番組を待ちわびるかのように、テレビに釘付けだ。

やがて、ローカルなワイドショーにて第一報が流れてきた。

『今日、午後一時過ぎ、K市の繁華街の食堂で飲食中の男性が突然倒れ、救急車でK病院に搬送されました。その男性は到着前にすでに亡くなつており、K署のその後の調べで、何らかの毒を盛られた事が判明しております』

いつやって死んだのを確認でき、ようやく肩の荷が下りたのを感じる。

『なお、亡くなられた男性は、近くの商事に勤める刈谷二郎さん、二十六歳で……』 了

7 (後書き)

もちろんフィクションではありますが、第三者の刈谷様の「冥福」ともにお祈りしましょう。ヨイボヤギ

「リリーは、やはり鈍器辺りで一撃を」

「やっぱり、そうですよね。勝負が早いですもんね。となると、夜にマンションで……」だが、まだ確認すべき点が残っている。そう、マンションのセキュリティだ。彼も思い出したようだ

「しかし、簡単に忍び込める事ができるか、だな」

「そうですね。そこがハッキリしないと仕切り直しになりますからね」

「笠間さんは、今から空いていますか？ もし良かつたら、実際にマンションを訪れたいんですけど？」

「そうですね、それが一番ですね。構いませんよ」

「すみません。じゃあ、日正式なうちに僕の車で早速

お田端での建物には、迷う事なく到着した。それに田をやる限り、まだ運は残っていると感じざるを得ない。健二君も喜んでいる。「ラッキーですね。どう見たって、そこらにあるマンションですね」「スカイロー宮という割には、高さも知れていますね」
(家賃も六万円近辺か？)

一人でガラス扉の前に立つたが、何て事はない、簡単に歓迎してくれた。

「管理人らしき人物もいませんね？」

「隣が、どうやらここを管理している不動産屋らしきですよ。とすると、恐らく夜もこんなものでしょう」

郵便受けで確認して、エレベーターで五階まで上がつてみた。ちよつと降りたところの田先にあいつの五〇三号室があつた。

健二君は、そのままドアに近づこうとした。

「ちよつと待つて！ 私は周囲を見渡した。

「防犯カメラらしきものもありませんね」

それを聞いて、彼は改めてドアを調べだして

「『』く普通の鍵にチーンというところでしょう。」れならば、荷物の配達人になりすまして、油断してドアを開けたところに一撃食らわせる事もできそうです」

「大きい荷物を持たれた方がいいと思いますよ」

この発言に首を傾げる彼は

「どういう意味です？」

「小さい荷物ですと、内側からチーンを掛けたままで受け取れますから。大きければ、必ずチーンをはずして、ヤツの全身を押む事ができます」

「なるほど。そして、押印している時にでも頭に一撃ですね」

「くれぐれも、相手の顔を見た瞬間、昂つて手元が狂わないようだ。一撃で終わらせられずに、一度・二度と追撃するのは困難だと見ておいた方がよろしいかと」

「そうですね」

と、素直にこちらの意見に従つてくる。子供ではないので、何で殴るのかまでは聞かないつもりにしている。

車で、再び自分の部屋に戻る際に、アリバイについて提案した。「決行日に、あなたにできるだけ似ている男友達を食事にでも誘つて、身代わりにします」

数多くはいないので限定はされるが、一応候補らしき男の顔は浮かんでいる。

「似ていると言つても、知れてるでしょ？」

「だから、何か特徴を　例えば、あなたは明日から肌身離さず赤い帽子を着用するとかして、それを周囲に印象づける。私の方は、当日に男友達を食事に誘つて、事前にプレゼントをした同じ赤い帽子を被らせて、店の人間にでもその印象を植えつけておく。これだけでも、後日あなたを見たボイドは、『確かにこの人でした』

つて証言しますよ。人間の記憶だなんて、所詮そんなものだと思いませんが」

「そ、そんなに上手くいませうか?」

「おどおじさえしなければ、問題ないですよ。恐らくあなた自身も、

そこまでしかなくとも似たよくな経験にお持せでは?」

「は、はあ。では、明日にでも早速赤い帽子を手に入れます」

可笑しいくらい真直ぐな人物だ。別に帽子でなくても、いや、仮に帽子だとしても、青で先黄色でも何でもいいんだが。

卷之三

是非 そしてください 赤手が領くのを見て、先を進める。

車は、私のマンションの前に着いた。別れる前に、一つだけ念押
ししておく事がある。

「できるだけ早目に決行日を教えてくださいね。」いつも段取りす
ら三回もぎりぎりまでつぶやく

「一週間ばかり、あいつの行動を追ってみます。おおよその帰宅時間やがわかるかもしませんから」

一日後に、電話があつた。決行日は、次週の木曜日の夜十一時以降である。それを聞いて、こちらの方の段取りもスタートさせる。

約束の木曜の午後十一時前、彼氏を装った男とのデートの最中だ。私は、予定通りに目をつけていたお洒落な店に食事を誘う。戦争のような、バタバタした居酒屋では覚えてはもらえないで、今回は少々奮発して落ち着いた店を選んだつもりだ。そんな事など露知らず、お馬鹿な隣の男は、もらつたばかりの赤い帽子を喜んで被つている。素直だけが取り柄なので、扱いにも困りはしない。

時刻は、十一時を回っている。気が気でないが、電話をする訳にもいかない。仕方なく、安全をみて、連れには一時まで付き合わせ

る事にした。だが、待ちかねていたものは、翌日になつても来ない。もつ、こうなつた以上電話をするしかない。

「もしもし」

やはり、何の反応もない。仕方ないので連れに一言、

「悪いけど、今日はこれにて解散！」

男を帰した私は、タクシーを飛ばして、再びスカイコー・ポまでやつてきた。だが、少し手前で降車した。そこに、パトカーが一台いるのだ。

嫌な予感が沸いてきた瞬間、

「か、笠間さん」

背後から声をかけられ、思わず声を出しそうになつた。

「ど、どうしたの？」

彼は、私の腕を強くつかんで、少し離れた建物の陰に連れて行つた。

「ね、何があつたの？」

突然、跪く彼。その手には、今なお凶器の鉄パイプがしつかりと握り締められている。一応、血がついているようだが。

「申し訳ないです。よく考えたら、夜の十一時にやつてくる配達人なんて不審極まりないですよね？ おかげで、構えられて反撃を受けました」

「反撃？ 怪我は？」

「そこから聞いてくださるとは、優しいですね。怪我はたいしたものではありません。あいつも、こちらの追撃で絶命しました……唯

「唯？」

彼は、鉄パイプを地面に置いて、完全に下を向いている。

「反撃を受けた際に、どうやら携帯電話を落としたようだ

即座に、現場に目をやつた。そこには、すでに複数台のパトカーが集まつてきている。そこで、つい言葉が口をつぶ。

「これは時間の問題、だなあ」

「す、すみません」

そう謝っている彼は、相変わらず土下座の格好だ。
私はこつそりと、転がっている凶器を手に取った。

了

8 (後書き)

少々、恐ろしい結末です。やはり、積極的に光さん自身を動かしてみるのが得策かと。byイボヤギ

「ここは、思い切つて車ごと燃やしましょう」「えっ？」彼は目を数回も瞬いて、再度「今、何と？」

「あいつを乗せて、車ごと燃やしましょう」「そんな大それた事なんて、無理ですよ！」

珍しくムキになつてゐる。

「そんなに大変な事とは思いませんが。逆に、覚悟の自殺のように見せかける事も可能かと。私ならば、この手段も有力な候補の一つです」

「そ、そうですか」

「でも、実行されるのはあなた自身ですから」 こういつた後、顔を近づけて

「何だつたら、私が代わりにやりましょうか？」

「い、いえ、それには及びません。僕がやると決めましたので」「ところで、話は変わりますが。女性に最も人気がある殺し方ってご存知ですか？」

「いいえ、知りませんが」

「毒殺なんですよ。やはり、直接手を汚さないからでしょうね」

「だつたら、僕も毒を使って……」

こちらが言う事に、どこまでも合わせてくる素直な性格だ。これが仇にならなければいいが。

「では、もう一つ。最も検挙される率が高い殺し方は？」

相手は少し考えて

「ひょつとしたら、それも毒殺ですか？」

「さすがに鋭いですね。その通りです。その理由は、素人が無理して入手するんで、足がつき易いんです」

「よくご存知ですね。しかし、今回は知人を通しますから」

「別に、その方を信用しない訳ではありませんが、その方の一存でつかまるかもしれないと考えると、どこまで行つても安心はできなかいと」

「じゃあ、お聞きしますが、その火炙りの刑を実行するには何が必要になります？」

「まずは睡眠薬」 これならば、素人の我々でも入手できますから、それから油、火種になる紙辺りのもの、ライター、それと目張り用にテープですね。これは、変な臭いが出たり、また燃えかすが残つたりするようなナビール製よりも、紙製の方がいいでしょうね」

健二君は、指を折つて数えながら

「特に入手が難しいものはないようですが、唯、どうやって睡眠薬を飲ませるか」

「そうですね。それと、頻繁に運転しているのか、例えば通勤に車を利用しているのかどうか」

「その辺は、明日にでも調べます」 そう言いながら、彼は一人でしきりに頷き

「そりやあ、自殺に見せかけるにこした事はないな
もはや、完全に言いなりである。やはり、性急な性格が気にはな

る。

アリバイに關しては、それほどの必要性を感じなかつたので言及はしなかつた。いつ実行されるかわからないものに、それを計画するのは土台無茶な話でもあるからだ。

翌日、早速報告が來た。どうやら、運よく車で通勤しているらしい。必要な物の中に、手袋の追加も教えてあげた。

一日後に、再び電話があつた。必要な物を全て手に入れたとの事だつた。睡眠薬は“超短時間作用型”を採用するようだが、よくはわからない。遺書などを作つて彼に渡そうかとも考えたが、余計な事をして足がつくのも本望ではないので止める事にした。時間が

あるのも困ったものである。

三回目の電話 いや、今回はメールである。これが突然来たのは、翌週の木曜日の夜十一時過ぎだった。

「今、ヤツがファミレスに入った。これから実行する」

どうやって睡眠薬を飲ませるつもりなのか、よくわからないし、想像すらできない。自宅待機のこの身だが、相当不安にかられる。その場で眠ってしまうかもしない。あるいは、その後の運転中にそうなつて事故を起こすかもしない。まあ、これはこれで良しとすべきだが、その際はどつか自損のみにして欲しい。

「今、店を出た」

「この後の報告がなかなか来ない。

「二十分ほどしてきたのが、『炎の絵文字』」これだけだった。

“今、燃えている”との意味だろうか？

健一君が姿を現したのは、すでに翌日の一時になつた頃だった。すみません、遅くなりまして。あいつが、車の中でナカナ力寝静まらなくて

そんな第一声よりも

「そ、それでどうでした？」

「ええ、無事に車は燃えつきました。救急車に入れられるところも見たんですが、丸焦げでした」

笑いながら言われると、身震いする。

「そうですか。これで、ようやく終わりましたか」

その後、テレビの画面を食い入るように彼はずっと見ている。

不思議な関係、だと思う。愛情なんてないし、かと言つて友情でもない。強いて言えば、仲間意識だろうか。だが、それ以上に行くとも到底思えなかつた。

「「J、これです！」

彼の言葉に、私も画面に目をやる。

『昨晚の十一時半頃、市内にて、通行人から“車が燃えている”との連絡がK署に入つてきました。場所はファミリーレストランの××店の駐車場で、車一台が全焼し、その跡から二十代から四十代と思われる男性の焼死体が見つかりました。なお、現在K署の方で、身元の確認を急ぐとともにに出火原因を調べているとの事です』

『白ずと溜め息が出てくる。

「本当に終わつたんですね」

新聞も要らない便利な時代になつたものだ。私は、常日頃、プロバイダーのサイトを見て、世情を知り得ている。

いつものように覗いたが、上から三番目の記事に目が留まる。

『捜査の洗い直し……』

すぐに、そこを開いてみる。

『一昨日の深夜、ファミリーレストラン の××店の駐車場にて車より焼死体として発見された男性 荒牧省吾さん（26）の死因飲究明中であるK署より、当初、“睡眠薬を服用した後、車を燃やして自殺を図つたもの”と発表されたが、その後の調べで、睡眠薬を飲んだ荒牧さんが、“嘔吐により吐き出したものが気管に詰まり窒息したのが直接の死因”と判明し、“その後に何者かによつて車を燃やされた”との訂正がされた。なお、現在K署では殺人事件に切り替え、当事件を再捜査中……』 了

9 (後書き)

偶然の悪戯による幕切れです。やはり、被害者の状況確認を怠った健一君の浅はかさ これが問題でした。b yイボヤギ

「そ、そうでしょうか？ やれそりでしようか？」

その後、彼の車で場所を私のマンションへと移した。

「やはり、綺麗にされていますね？」

「そんな事はないですよ。まあ、ここにでも座つてください」

「早速、話の続きなんですが。まずは敵を知る事から始めましょう」

「そう言って、健一君は車から持ち出してきた地図を捲り、指で小さな円を描いている。

「住処はこの辺りのスカイコーポなるマンションです」次に、別の頁で同様の作業をし

「ここが勤務している 商事です」

「K署が、やけに近いですね？」

「まあ、怪しまれない限りは大丈夫でしょう」

「ここで彼は一冊の可愛らしい手帳を出してきて

「実は、姉の日記なんですが」

「日記？」

「ええ。一応昨夜読みまして、重要なと思われる点をまとめておきました」

「言ひながら、自分のメモ帳を取り出している。

「重要な点とは？」

「ええ。主に荒牧に関するものを拾い集めたんです」メモ帳を繰り出した彼は

「例えば、趣味がバンドで、どうやらギターを弾いてるらしい、とか」

「アマチュアバンドのギタリスト……」

「はい、バンド名は確かクルキアタだったかな？ まあアマチュアながら、かなり女の子たちに人気があるようです」

「そうか、だから醜聞も増える訳だ。彼は先を続け
「それと商事会社では、営業部にいるようですね。日記を見る限り、
かなりの社交家に思えます。ショッキング、女からの電話もあった
みたいで」

振り回される亜佐美の姿が田に浮かんでくる。しかし、
「それ以上は結構です」

「わ、わかりました」

さて、まずはいかに接近するか、だ。彼も同じ事を考へているよ
うで、視線を下に向けたままである。

じばらくして

「やはり……」「それでは……」
と、同時に声を発した。これを、息が合ひてきたとでも言つて差し
支えないだろうか？

「どうぞ、健一君の方から」

「あ、はい。では、接近する方法なんですが」彼は、唾を飲み込み
ながら

12、「ここはオーソドックスに、マンションの前で話しかけて印
象を植えつけるとか？」

13、「あいつの車の前に飛び出して、轢かれた振りをして接近を
計つてみるとか？」

14、「熱狂的なファンを装つて、あいつのコンサートに赴向いて、
アピールするとか？」

「えっ？ それは無理といつものですよ
猛烈に反対した。

「そりでしようか？」

「当たり前です。無理なものは無理です！」

「いや、笠間さん、あなたなら……」

この時、私はこの計画自体から身を引く決心をした。なおもしつ
じく言ってくる、こんな愚者とはこれ以上付き合ひきれない。

「いつたい何ができると申うんですか？ 男の、この私に！」 了

1-1 (後書き)

この章だけ、光さんが男になつておつます。どうぞ、お怒りをお静め下さいませ。b yイボヤギ

「Jリーグはオーソドックスに、マンションの前で話しかけて印象を植えつけるとか？」

同感だ。

「そうですね。男のあなたなら、どのよひに声をかけられたら心が動きます？」

健一君は懸命に考えた後、

「例えば、『何とかさん!』と呼ばれて振り返つてみると、『あつ、ごめんなさい、人違いでした』なあんて、はにかんで言われた日にや、『口口ッといきますよ』

と、一人で悦に入つておられる。

「なるほど、人違いを利用するのですか。なかなか良さげな案ですね」

「でしょ? Jリーグでのポイントは、やっぱり演技力でしょう」

思わず呟く。

「演技力ねえ」

「何なら、僕が相手役になつてもいいですよ。とにかく練習あるのみ、です」

それからば、時間が空き次第、練習に精を出してみた。

ほぼ見れる演技にまで上達するのに、一週間もかかってしまった。敢えて雨の日を選択した。これが、ムード作りに一役買つてくれる そう信じているからだ。

持ち合わせている中で、一番可愛らしいワンピースを見に着けた。似合つているかどうかは別の話だ。それから、インパクトを『える よう赤い傘をして、いざ外へと出陣した。

あいつが住むスカイコープの前で、赤い傘を開いたまま、早三十

分ぐらい経過している。風邪でも引いたら、それこそ馬鹿らしさと言つものだ。

やがて、出直しを検討している時に、ようやくお田辺の人物が姿を現してくれた。亜佐美の写真に写っていた顔は、この脳裏にハッキリと刻まれている。単なる遅刻だろうが、それにしても、かなり急いでいる風に見える。

15、「あら？ 倉田さんじやありませんか？」

16、一度しかチャンスはないので、延期にしよう。

「あいつの車の前に飛び出して、轢かれた振りをして接近を計つてみるとか？」

「当たり屋をやれって言つんですか？」

「驚きのあまり、つい大声になる。」

「まさか！ 車の前に飛び出すだけですよ。例えば、信号待ちをしている前を通つてみるとか」

「この場に及んで、彼の限界を垣間見たような気がした。」

「そんな機会が訪れるのを、どうやって待てと言つんですか？ ずっと車の後ろを追いかける、とでも？」

「えつ？ た、確かに」

「だが、考えとしてはまんざら悪くはないので」

「では、マンションの駐車場から出てきたところを狙つて、車の前で転んでみましょ。まだ徐行中だから、多分大丈夫でしょう。多分ね。」

「気をつけてくださいね」

自分で提案しておきながら、案外無責任な男だ。だから、男つてやつは……

早速、一日後の朝に、スカイコープの門前にいる私だ。健一君は駐車場で待機して、連絡をくれる手はずになつていてる。

「今、やつてきました。あつ、車に乗り込みエンジンをかけました。そろそろ、そちらに向かいますよ。いいですか、赤いツーシーターです」

「どうやつて、正面からツーシーターを判断するのか、是非ともこの人に聞いてみたい。」

すぐに赤い車の姿が目に入ってきた。思つたとおり、まだ速度は

かなり遅い。一、二メートルの距離になつた時、その前に飛び出し、怪我をしない程度に転んでみせた。こつ見えて、家で何回も練習した成果だ。そして、車の方を見て悲鳴を上げる。この後の事は一切覚えていない。

ベッドの上で生活も、早一週間になる。左足首の複雑骨折らしい。

初日以来、見舞いと書つか、謝りと書つか、とにかくあいつはやつてきた。せつかくの接近できるチャンスではあったが、あまりにもムカついたため、けんもほろろに追い返してしまった。今考えるに惜しい事をしたのだ。もちろん、それ以降は姿を見せには来ない。

「ひやつて退屈な日々を送つてはいるが、闘争心も薄れて、いや、なくなつてしまつたと言つた方が正しいだろう。それ以来いか、何やらおかしな心が芽生えてきているのだ。

健一君は、言い出しつべの責任を感じてか、毎日欠かさず見舞いに来ては身の回りの世話をんぞを健気にやつてくれてはいる。思つた以上のいいヤツだ。

そもそも、彼も説得してみよう……今はひつひつてはいる。了

13 (後書き)

かなりの無茶をされました、このよつな“見え見えの”結末もたまにはよいかな……かのように思つ次第です。どうぞ、健二君と末永くお幸せに！　b yイボヤギ

「熱狂的なファンを装つて、あいつのコンサートに出席して、アピールするとか？」

「なるほど、それもありですね。でも、アピールできるかどうか」「所詮アマチュアバンドですから、コンサート会場に早めに行けば、最前列を確保できるでしょう」

「そこで、声を大にして声援を送る訳ですか？ もし、それでもアピール不足だつたら？」

いやな役回りだが、仕方ないかも。

「その時は、樂屋 というか、着替えとかしている部屋にでも押し入つてみてはどうかと」

他人事だから言えるんだよね、そんな事を。だが、そんな表情の優れない私を見て

「やっぱり、駄目でしょ？」「

「い、いえ、何とかしてみましょ？」

竹を割つただけでなく、その上を易々と歩いてみせる、この自分の性格が少し嫌にも思つ。

コンサート当日、頑張つて最前列確保に成功した私だが、まるでこのまま仮装行列にでも参加できそうな出で立ちだ。妹に借りた服だが、ジッパーも最後までは上がりきれない。残念ながら、声をかけた友人たちには、見事に全員に振られてしまった。

とにかく、予想を上回る熱気だ。目の前には、恐らく、あいつと思われる男が白いエレキギターを振り回している。だが、派手なメイキャップのおかげで断定はできない。

とにかく、周囲の娘らが若くてウルサイ。恥を忍んで対抗するも、声 자체に張りがないのがちと哀しい。

案外マシなコンサートだつた。一昔前の“何とかミゼル”を髪髪とさせるものだつたが、大きくオリジナリティに欠けるのが、素人といえば素人である。だが、全くあいつにアピールができなかつたので、言われたとおり楽屋へと向かう。しかし、そこまで行くのに、例の乳臭い娘どもがウヨウヨとたむろしており、一歩も進めない状態だ。めげずに強引に搔き分けていると、横から

「こり、痛いやんか！ このババア！」

普段は打たれ強いのだが、今の一言は心の中心を綺麗に貫いてくれた。

「駄目じゃん、いい歳して喧嘩なんかしちゃ。それも、相手は高校生だよ」

その後、訳が分からぬうちに、取調室に連れて来られていた。目の前の刑事は誠に慇懃無礼なる男だが、言つている事は的を射ているので何も言えない。

「それにさ、妹のか何かしらないけど服まで借りたんでしょう？ ジッパーが上がりきれてないよね」

思わず背中に手をやる。いつ見たのだろうか、それにしても観察力が鋭い。

「まあ、相手側から被害届も出でないからさ、今日のところは帰つてもいいよ。じゃあね！ もう来ちゃ駄目だよ」

下手をしたら、あのような刑事と相見えるかもしれない。そう考えると、再度計画を吟味した方がよいかも 警察署の通路を歩きながら、私は思いを巡らした。

「玄関から外に出たところで、健一君が待つていてくれた。

「大変でしたね。そ、それにしてすゞいアザになつていますよ」

「どうか、鏡なんて見る暇がなかつた。

「まあ、相手が五人でしたから。それよりも、もう一度計画を練り直しましょうか？ このK署はかなり手こわいと思いますし」

「わかりました。では一旦戻りましょう、”10番”まで
そう言って、彼は肩を貸してくれた。久しぶりに、身に沁みてく
る優しさだった。了

14 (後書き)

失敗は成功の元と言います。再チャレンジされてみては如何でしょう？ ちなみに、この刑事は、拙著愚作シリーズである奇跡署のメンバーの一人、山迫刑事です。b yoiボヤギ

「あら？ 倉田さんじゅ ありませんか？」

別に名前なんて何でもよかつたので、高校の時の恩師のを拝借した。そう声をかけられたあいつが、驚いてこちらを凝視する。やはり、ステージの上とは別人だ。

「だ、誰？ ……ですか？ 人違いですよ。ちょっと急いでいますんで」

「倉田さんでしょ？」

まだも食い下がる私に

「違いますつて！ ははあ、何かの勧誘の新しいやり方ですね？ まあ、頑張ってください。じゃあ、失礼！」

走つて立ち去る時に、こちらにぶつかり、赤い傘が地面に裏向きに落ちてしまった。だが、それを拾う事さえ忘れていた私。引き止めるだけの魅了がなかつた？ い、いや、遅刻しそうで慌てていたからだ。しかし、失敗した上に面まで割れてしまうとは… 一から考え直す必要が出てきたのは事実だった。 了

15 (後書き)

もう少しだけ落ち着いた行動をされた方がよろしいかと。しかしながら、結果として罪を犯さなかつた訳ですから……ホッとしました。

b yイボヤギ

一度しかチャンスはないので、延期にしよう。面が割れたら、一回田はない。

「結論を出し、その場を後にした。

洗濯したワンピースも乾いた一日後、再度決行を試みた。今日は晴れている。もう、雨などはどうでもよい。だが、傘がない分、この格好は相当に恥ずかしい。

今回あまり待つ事もなく、あいつが登場してきた。早速、声をかけてみる。

「あら？ 伊吹さんじゃありませんか？」

別に名前なんて何でもよかつたので、中学校の時の恩師のを拝借した。そう声をかけられたあいつが、驚いてこちらを凝視する。やはり、ステージの上とは別人だ。

「おたく、どなたですか？ 僕は伊吹なんかではなく、荒牧と申しますが？」

「えっ？」、「ごめんなさい。あまりにも知り合いで似ていたもので、つい……」

と言しながら、深々と、かつできるだけ可憐らしく頭を下げてみる。恐らく、ヘアコロンのフローラルな香りが、その鼻をくすぐつくる事だろう。

「いえいえ、そこまで謝らなくても。誰にでもある事ですから」耳に届く声が優しすぎる。これは脈があるかもしれない。さて、続いて何を話そうか。

「あら？ もしかしたら、クルキアタのギタリストの省吾さん？」

18、二七、一〇五年五月廿九日、見つめられておひ。

「あらつ？ もしかしたら、クルキアタのギタリストの省吾さん？」
「えつ？」

そう言つたきり、相手から笑顔が消えた。

「この顔を見ただけで、普通はそこまで思わないよね？」

「自分で把握していらつしやる。さうに、

「単なる追つかけでしょ？ 困るんだなあ、朝つぱらからさ。近所の手前もあるしね」

「追つかけなんかじゃありません！ 本当に偶然なんですかり！」「はいはい、そういう事にでもしどきましょ。じゃあ、急いでいるから」

そう言葉を残して、あいつはせりあと車の方へと歩いて行つてしまつた。

面まで割れたのに何もできなかつた私は、この場に呆然とたたずんでいる。

弱つたな。これで一人とも面が割れてしまった。果たして、我々には、他にどんな方法が残されているのだろう？ 了

17 (後書き)

一言余計でした。さて、次はどういたしましょう? ちなみに“クルキアタ”とは、ラテン語で十字軍の意味でした。bヨイボヤギ

いや、ここは何も言わずにじっと見つめておいで。相手から喋つてぐるのを待つた方が得策だ。

「どうされました？」

「い、いえ、本当に申し訳なかつたと」

爪先から頭の頂まで舐めるような視線に気がつく。少々の手応えは感じるが、同時に大いなる嫌悪感も湧き出でている。

「そうですか、そこまで悪いと思われるのなら、罰として一度デートでもしましようか？」

「ファン、乗つて來たか。さて、ここからはアドリブで頑張つてみるか。

「で、でも、そんな見知らぬ方といきなりデートの約束だなんて」

「そう言いながらも、背中にブツブツが出来しそうだ。」

「ははは、始めは誰でも見知らぬ方ですよ」

「なかなか魅力的な笑顔は見せてくるが、所詮底が浅そうな男だ。」

「そ、それはそうなんですが」

「ははあ、彼氏の事を気にしてるんですね？　いいじゃないですか、一度きりのデートなんですから」

「そ、そんな事……彼氏なんていませんから」

「情けないが、今日初めて正直な事を言つた。それを聞いて、相手が喜ぶ事！」

「えつ、そうなんですか？　だつたら、問題なしですね。いやあ、実は、僕も彼女がいないんですよ」

「この嘘つき野郎め。亜佐美の顔を思い出してきて、無性に腹が立つってきたが

「そ、そうでしたか。彼女、いないんですか」

「ええ、本当ですよ。あれ？　ところでまだお名前を聞いてなかつたですね？　申し遅れましたが、僕は、荒波の荒に、牧場の牧、反

省の省、それから西暦の西と書いて、荒牧省吾とここまわ。キミは
?」

フン、反省とまよへ書つたものだ。さて、どうしたものか?

19、今後、いつ何時ばれるのかわからぬので、こゝは本筋でい
こゝ。

20、やはり、西佐美との関係がばれる恐れがあるので、偽名を使
おう。

今後、いつ何時ばれるのかわからないので、ijiは本名でこう。う。

「笠間 竹冠の笠に間です。名前は漢字一字で、光です」

「笠間光……何か聞いた事がある名前だなあ」顎に手を当てながら

「ちょっと待つてね」

彼は、そういう残して、再びマンションの中に消えていった。
お、おい、会社は？ いや、そんな事よりも、かなり拙い展開になってきた。

しばらくして、戻ってきた彼は

「やつと見つかったよ」と言つて、一枚の写真をこちらに見せ

「ねえ、この亜佐美の隣にいるのって、どう見てもキミだよね？」

それを見るまでもなく、間違いなく本人だ。私も、同じものを机の上に飾っている。

A、「そ、そうかなあ？」

B、「い、いえ違いますよ」

どちらの選択肢を持つとしても、時すでに遅しである。

「まあ、どっちでもいいんだけどさ」相手の表情が豹変し

「何しに、のこのこと僕に会いに来た訳？ あいつってさ、病氣で勝手に逝っちゃつただんだろう？」ねえ、一体何しに来たのさ？」

亜佐美は、あんたのせいで自殺したんだよ いつも叫ぶ前に、短気な私は、目の前にある股間を思いつきり蹴り上げていた。

その場で悶絶する馬鹿者を放つたままで、自分のマンションへと戻つた。その途中で、亜佐美に心から謝る私だった。

「ごめんね。復讐するなんて大見得を張ったのに、股間を蹴り上げる事しかできなくつて……」了

19 (後書き)

いつも正直なのがベストとは限りませんが、殺人まで犯しておられないでの、これもいいかと。ちなみに、馬鹿者は全治一ヶ月だと耳に入つてきました。b yイボヤギ

一曰、あがり

やはり、亜佐美との関係がばれる恐れがあるので、偽名を使おう。
だが、おろかな私は、何も考えていなかつたので

「き、岸見……アン、です」

何の事はない。忘れる事のないよう、「苗字は、『かさま』の
それぞれを一字だけ後ろにずらしだけだ。名前の方はそれもでき
ないので、『光』の逆の『暗』を、それらしくカタカナにしただけ
である。

「へえ、アンつて言つんだ。いい名前だよね。ねえ、ひょつとして
ハーフ?」

全くもつて、気づかなかつた。が、ものはついでだ。

「ええ、父がフランス人で、母は日本人です。でも、一度もフラン
スを訪れた事はありませんが」

一応、ボロが出ないようこう言つたが、白々しくも、急に
巻き舌になつた。

「そつか。いいよねえ、ハーフつてさ。とにかく、アンちゃんつ
て、今度の日曜は空いてる?」

本音を言つと、こんな初対面からタメグチをきくヤツが大嫌いだ。
しかし、携帯電話のスケジュールを見る振りをして

「えつと……空いていますが」

「本当? だつたらや、あそこ行こうよ、ディスティーランドー」
もう、嫌というぐらい行つてるんだがなあ。

「え、ええ。わかりました」

その後、遅刻なんて何のその、電話番号やメールアドレスやら
をしつこく聞かれて、ようやく解放された。

これで第一段階はクリアした。早速、健二君にも報告しておこう。
それにしても、住所まで聞かれて助かつた。こればかりは、さ
すがに世の中に存在しない所は言えないからだ。

早、一ヶ月が過ぎてしまった。幸か不幸か、今のところ順調な交際が続いている。どうやら、あいつも当方の魅力に徐々に惹かれている模様だ。会う感覚が短くなってきてているのが、その証拠と言えよう。これはこれで、何だか自信がついたようで嬉しいものである。

さあ、健一君と打ち合わせをしなくては。そろそろ、第一幕を上げようではないか。

一回、あがり（後書き）

お疲れさまでした。ここまで来られました皆様方。貴殿には素質が（何の？）備わっておられるようにお見かけいたします。その中でも、ストレートに来られた方。恐ろしくて、今、思わず身震いしてしまいました。なお、そのうちに第一幕も開くこととは思いますが、お気づきのように展開が苦しくなつてきてあります故、ここら辺りでしばし休息を取らせていただく所存です。では、またお会いしましょう。本日は誠に有難うございました。08/09/27*25
0名様が読破されました。拙著に貴重なる御時間を頂戴しまして、心より御礼申し上げます。実は、個人的には最も気に入つておりますので、是非とも第二幕も書きたいのですが……パワーがありません、今のところ。09/06/05 やはりありません>パワー
1. 10/02/28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0590k/>

サウンドのないサウンドノベル “殺人を前提としたお付き合い” 第一幕

2010年10月8日15時23分発行